

の形成期を経ていよいよ今日の社会福祉協議会は本来の活動にのりだすべき時期がきているのである。現在の我國の町村部に於る種々の社会現象は社会福祉協議会が本来の活動を開始するに最も適当な時期であることを示しているのではないだろうか。これらの社会現象を適確にとらえ、それに合つた活動を展開すれば地域の組織化も十分可能なものとなつてくるであらう。

## 特殊学級に通つてゐる児童の

### 余暇指導への一考察

西川 哲

精神薄弱者が問題になるのは、普通の人間を主とする

社会に生存するからだということになるが、人間という最も高度に発達した生物では、そのひとりひとりに能力の差があり、あらゆる時期に故障をおこす可能性があるので、精神薄弱者がいることは例外のことではな

く、本来、人間の社会は、精神薄弱者がいる社会だといふことが前提とされねばならない。このような現実をどう認め、どう受けいれるかということが、それぞれの社会のありかたをめぐるものになる。

そこで、社会や親のその子に対する正しき理解のもとで、その指導のよろしきを得れば天与の能力を充分に伸ばし得ることは、よく知られている処である。しかし、そのためには、こどもをよく理解し、その資源と能力に応じた適切な指導がなされねばならない。

一般に特殊学級の指導は、生活指導に重点がおかれ、遊びや作業、技能、感覚の訓練を通じ、まず仲間との協力や、きめられたルールを守ることなどを繰返して指導しているが、その子供たちの社会性の低さは、家庭では「もてあまし者」になり、地域の同輩、仲間たち、からも相手にされず孤立している。

「遊び相手がない」「遊び方を知らない」ことからともすれば放任され、いろいろの好ましくない事例の発生がまま見られる。だんだん年令が進むにつれて、街頭放浪、浪費、映画館での不純行為など、教師、父兄の肝を

寒からしめるに充分な事例が多い。

一方、家庭では、遊び相手がないために、家にとじこもりきりで、猫が唯一の遊び相手といった生活を毎日くりかえしているものもある。

精神薄弱児の日常生活において、その自由な時間の用い方は、きわめて重要である。

一般によくいわれるように、彼らが、これを正しく生かすときには、その精神的発達を促がし、精神的内容を豊かにし、社会に適応した健全な人格を養うことに役立つであろう。その反対に用い方をあやまるときは、社会的不適応に陥るであろう。このような意味で精神薄弱児の余暇指導は、その教育の中で不可欠の重要な位置を占めるであろう。

余暇の利用ということは、習慣や態度の問題なのである。その意味で日常の生活指導の一環として、再三反復して指導が行われなければならないでしょう。

そして、指導の対象は、精神薄弱児一般ではなく、一人一人の個人であり、しかもその個人差が著しいことから、余暇指導も個別的に考えられねばならないことは言

うまでもない。そこで個人に対する余暇指導の手続きとしては、

(一)まず個人が余暇の過ごし方のどこに問題があるのか  
集団生活への参加に関してか、あるいは余暇の技能  
に関してか、などの究明が必要である。

(二)それでは、その問題がなぜ起こったのか、心身の発達状況が原因なのか、性格的に問題になるのか、などの原因追求がなされねばならない。

(三)指導対策が個人、個人の所属する学級集団や家庭に  
対してそれぞれ樹立されてのちに、指導の実践がなされ、その結果が反省されて、さらに次の指導対策が発展的に、末広がりの取られていかねばならない。

## 養護施設における

### グループワークについて

成 田 哲 恵

人間の最も基本的な要求は、自己保存と種属保存の要